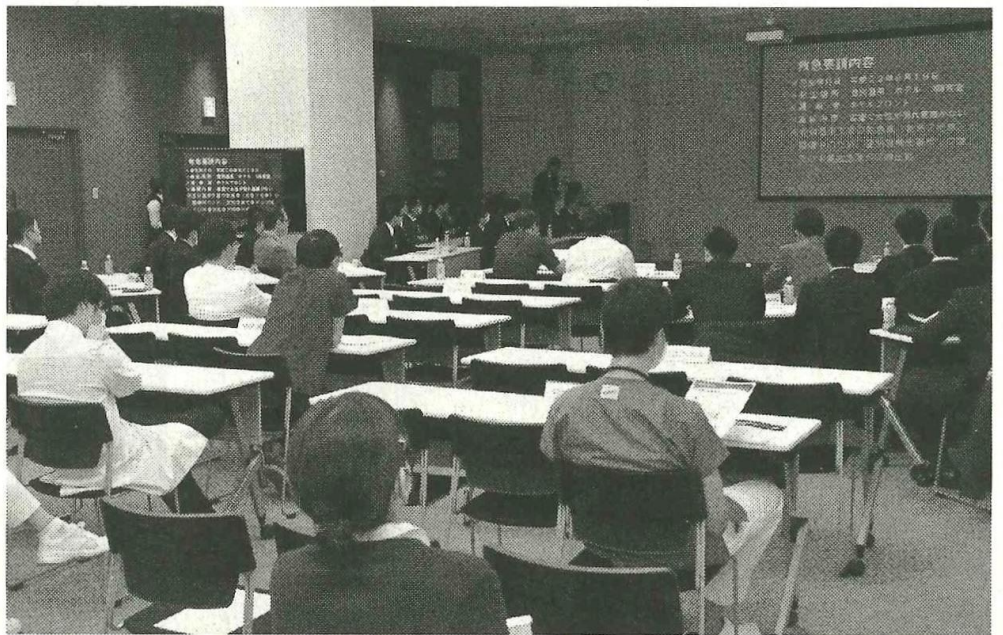


訪日客から要請 急性大動脈解離

救急隊員ら情報共有



製鉄記念室蘭病院に運ばれた救急症例を通じて、情報を共有した検討会

製鉄記念室蘭病院 症例検討会

製鉄記念室蘭病院(前田征洋病院長)の救急症例検討会が、室蘭市知利別町の同病院で開かれた。参加した西胆振の救

急隊員らは、訪日客から救急要請を受けた際の対応について情報を共有したほか、西胆振地域の急性大動脈解離の現況など

に理解を深めた。検討会は、同病院に搬送した症例のうち、救急隊員らが行った特徴的な対応などについて、西胆振管内の救急隊が情報を共有するための勉強会。

室蘭、登別、西胆振、白老各消防の救急隊員や、同病院の医師ら約80人が参加。計四つの症例について報告・検討した。

この中で、登別市消防本部の佐藤文人さんは、ホテルの客室で倒れた女性とその姉がシンガポールからの訪日客で、言語も分からない状況だったが、ホテル従業員を介して状況を聴取したといった「言葉の壁」によって活動が妨げられた症例について説明。

同市内の外国人救急搬送件数が、5年前と比べて3倍増となっている現状にも触れ、「添乗員や通訳がない場合は、状況聴取が困難になったり、言語が分からないと携帯アプリも使えない」とした一方、「通報時の情報の大切さを再確認できた」と強調した。

また、西胆振管内での急性大動脈解離の現況について解説した赤坂伸之(あかざのぶゆき)心臓血管外科長は、同管内のほぼ全症例が同病院に搬入され、この2年間で93例が診断された実情などに触れた上で、「高齢化の影響からか、急性大動脈解離の発症性は多い。緊急手術が可能で、合併症がなければ救命できる確率が高い」などと説明した。

このほか、救急隊員からは「乳児のアナフィラキシー症例」や「低血糖傷病者にブドウ糖を投与した症例」「声門確認の際にちゅうちよした気管挿管症例」なども発表され、参加者は一刻を争う事態での迅速な対応や、連携した搬送の重要性などを改めて確認していた。

(松岡秀宜)